

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006年～2008年

課題番号：18320053

研究課題名（和文）文芸におけるアフリカ表象の変容：日欧比較研究

研究課題名（英文）The Black Presence in European and Japanese Literature

研究代表者

藤田 緑（FUJITA MIDORI）

東北大学・大学院国際文化研究科・教授

研究者番号：10219024

研究成果の概要：18世紀英独仏の文芸は、トルコの脅威やイスラーム教徒による海賊行為等の過去の記憶と現に横行する事件を好んで題材に選び、トルコ人とアフリカ人の登場する通俗的「トルコものオペラ」が人気を博した。他方、アフリカを舞台に、或いはアフリカ黒人を主人公に据えて、英独仏の現実を映し出す観念的な作品も生まれた。本研究は、これらの埋もれた作品を発掘し分析を施したうえで、視覚資料や地理的情報が主流の江戸の黒人像との相違も明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
2007年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2008年度	2,900,000	870,000	3,770,000
年度			
年度			
総計	10,300,000	3,090,000	13,390,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・外国文学・文学論

キーワード：アフリカ表象、黒人像、啓蒙、アビシニア、西インド諸島、J.M.R.レンツ、クニッゲ、サミュエル・ジョンソン

1. 研究開始当初の背景

アフリカのなかでもアビシニアは、旧約聖書の「翼で陰る土地」（イザヤ書）の記述やヘロドトスの『歴史』の記述をまつまでもなく、古からヨーロッパでは頻繁に言及されてきた地域である。しかし、実際にエチオピアが脚光を浴び、ある種の存在感を持って人々に受け入れられるようになるのは、サミュエル・ジョンソン(1709-84)の『アビシニアの王子ラセラス』(1759)（以後『ラセラス』と略記）の出版からであるといえる。実際のアビシニアへは、1770年にJ.ブルースが到達し、『ナイルの水源発見の旅』(1790)によって統治の風習や地理に関する詳しい——その真偽はともかくとして——報告がなされた。

サイードの『オリエンタリズム』(1978)以降、「東方文化」、「東洋文化」の研究が盛んとなったが、サイーディアン・サイーディストであろうと、反サイードの立場をとろうと、彼らの「オリエン」に包摂される「アフリカ」はせいぜいエジプト、北アフリカまでである。他方、黒アフリカに関する研究においては、歴史、政治、経済、文化人類学、美術がその中核を占める。18世紀ヨーロッパの異国趣味の中心をなした「トルコ」や「ムーア」人や、黒人と同一視されることの多い「インド」人ではなく、純然たるブラック・アフリカのイメージに焦点を定めた研究は、ヨーロッパでも日本でも少ない。本研究をスタートさせるに至った背景はそこにある。

2. 研究の目的

第一に、ジョンソンの『ラセラス』がヨーロッパ、主としてイギリス、ドイツ、フランスの文芸思潮に与えた影響について解明する。ドイツの異色の劇作家 J.M.R. レンツ(1751-92)の戯曲『切り狂言のための喜遊劇 アビシニアのキリスト教徒』(1780年代中葉、以後『アビシニアのキリスト教徒』と略記)と、同じくドイツの啓蒙主義的作家アドルフ・クニッゲ(1752-96)の風刺小説『ベンヤミン・ノルトマンのアビシニア啓蒙物語』(1791、以後『アビシニア啓蒙物語』と略記)を取り上げ、これらの作品の分析を通して、ジョンソンとの関連を明らかにする。

第二に、啓蒙の時代のイギリス、ドイツ、フランスにおいて発表されたアフリカを題材とする小説や戯曲と絵画に焦点を当て、各文化圏におけるアフリカ表象の意義とその変容を明らかにし、その上で、日本のアフリカ表象に与えた影響について論究する。

第三に、18-19世紀を通して、イギリス、ドイツ、日本で埋もれている新資料の発掘にも努め、それら作品の内容と影響関係の有無を明らかにする。

3. 研究の方法

藤田は、本研究の基盤のひとつとなるサミュエル・ジョンソンの『ラセラス』(1759)の分析とヴォルテール(1694-1778)の『カンディード』(1759)との比較、ならびに当時のアビシニア知見とその認識を中心に、18世紀イギリスにおけるアフリカ表象の考察を進める。ジョンソンが参照したと思われるアビシニア情報にはこれ以外にどのようなものがあるのか、18世紀中葉までの、アビシニアを中心とした英国図書館でのアフリカ文献調査を通じて、イギリスにおけるアビシニア知見を整理し、当時の英国人のアビシニア・アフリカ認識を解明する。また、英国図書館においては、18世紀に流行したアフリカ小説の発掘に努める。

佐藤は、18世紀ドイツ文学における非ヨーロッパの受容を広く見渡したうえで、J.M.R. レンツの『アビシニアのキリスト教徒』に考察を加える。また、オーストリア国立図書館においてアジア・アフリカ旅行記を中心とするドイツ語文献を渉猟するとともに、18世紀ドイツで流行した「アフリカもの」戯曲の発掘に努める。

笠原は、クニッゲの『アビシニア啓蒙物語』におけるアビシニアの持つ意味合いを、ドイツのみならずフランスの視点から探る。その際、ヨーロッパ啓蒙の文脈から、モンテスキューの『ペルシア人の手紙』(1721)やルソーの『人間不平等起源論』(1755)にみられる文明批評を再考しながら読み解く。

本研究は、原典精読による分析を中心とする。同時に夏季あるいは春季休暇を利用して、英国図書館、オーストリア国立図書館において、資料の整理と埋もれている18世紀のアフリカを扱った小説・戯曲の発掘を目指す。

4. 研究成果

本研究の出発点となったサミュエル・ジョンソンの『アビシニアの王子ラセラス』(1759)は、アビシニアの王子ラセラスとその妹が、老詩人イムラックを伴ってエジプトを遍歴しつつ、幸福の意味を探求するという観念的な物語である。アビシニアの隔離された幸福の谷での歓楽に飽きてエジプトの都へ赴くものの、都会の青年らは軽薄、哲人から生きる上での指針を仰ごうとするもその哲人は名ばかり、洞穴に住む隠者は隠者であることを呪いながら暮し、宮廷や一般家庭も嫉妬や不満が渦巻くなど、ジョンソンは一筋縄では行かない現実の世の中の欺瞞と虚構を暴きだす。結局は理想的かつ完璧な幸福などどこにもないことを知るに至り、王子らは幸福の谷に戻ってゆく。アビシニア、エジプトを舞台に物語は展開するが、これら「東方」地域があくまで舞台装置にすぎないことは、王子や妹の容姿の特徴の言及がないことから明らかである。このように思弁的な作品ではあるが、当時流行していた文芸モチーフであるアラブ人による誘拐やトルコ兵による進軍も巧みに取り入れられている。その傾向がより顕著にみられるのが、ヴォルテールの『カンディード』(1759)である。登場人物がサレのトルコ海賊に襲撃され奴隷となってモロッコに連れて行かれ、チュニスやイスタンブールに転売される。カンディードは南米へ出かける際にロビンソン・クルーソーのフライディを想起させる「世にも善良な」従者を連れる。『ラセラス』も『カンディード』も「最善説」に対して批判を加えるものであるが、異人表象という観点からすれば、実に通俗的といえる。

18世紀のイギリス・ドイツ・フランスでは漂流譚や航海記・旅行記がブームの一方で、南欧文芸の翻案ものが流行り、トルコの脅威やイスラム教徒による海賊行為といった過去の記憶と現に横行する事件が文学に取り込まれ、実に多彩な作品が生み出されていた。なかでもヨーロッパを席卷した「トルコものオペラ」は配役にトルコ人とアフリカ人が欠かせない。従って、アフリカ表象をピンポイント的に取り上げるのではなく、むしろトルコ人やペルシャ人、アラブ人の有色人表象という大枠のなかで検討を加えることが肝要となる。アフラ・ベーンの『オルノーコ』(1688)、ウィリアム・コングリーヴの『喪に服する花嫁』(1697)、ヴォルテールの『ザイール』(1732)、アーロン・ヒルの『ザーラ』

(1736)、サミュエル・ジョンソンの『アイリーニ』(1749)、ウィリアム・ドッドの「アフリカの王子」(1749)、メアリー・モンタギューの『東方書簡』(1763)をみる限りは、少なくとも18世紀中葉のイギリス文芸においてトルコ人、ペルシャ人、ムーア人はほぼ同一視されているばかりか、彼らのイメージはアフリカ黒人のそれとも錯綜している。それは、アングロサクソンにとって中国もトルコも北アフリカも「東方」の非キリスト教圏であるものの、地理的にも人種的にも遠い中国は別のカテゴリーとして認識され、それ以外の地域はほとんどイスラム圏で褐色の人種によって占められることによる。皮膚の黒さの濃淡よりも、残虐さや異端さや好色さという性癖に描写の力点が置かれるも、印象としてはそのような性癖の持ち主は即ち「黒人」という図式が定着したゆえの「錯綜」といえる。そのなかでも、サハラ以南アフリカの黒人に関しては、『オルノーコ』によって、アフリカの王子、「高貴なる野蛮人」のイメージが突出し、以来、アフリカものでは「王子」がキーワードとなった。W. ドッドの実在の人物を主人公に据えた空想の長詩「アフリカの王子」が人気を博したのも、実際には王子ではないが王子に等しい身分が大いに関係している。『ラセラス』もある意味でその系譜に連なる。アフリカ大陸からやってきたアフリカ黒人は、「やんごとなき」出自ではなくとも、「プリンス」と名乗ることが多くなった。時代はやや下るが、プーシキンも『ピョートル大帝の黒奴』(1827)のなかで曾祖父を「黒人国の公子」としている。

しかし現実のロンドンでは、小規模ながらも黒人社会が形成され、黒人人口は増加の一途を辿った。1780年代には奴隷貿易廃止運動が市民を巻き込んだ形で展開され、社会には逃亡奴隷や無産の黒人があふれた。彼らの大半は、直接アフリカからではなく西インド諸島等植民地からやって来た人々であった。とりわけ米国独立戦争時に解放を交換条件に英国軍として参戦した米国黒人人口の流入によって、1786年1月には「黒人貧民救済委員会」が設立され、翌87年には四百名を超える黒人が政府の渡航資金の援助も受けて西アフリカのシエラ・レオネに移住した。他方、文芸の世界では「高貴なる野蛮人」がもてはやされていた。しかし、現実とこのイメージの乖離も、西インド諸島出身の黒人奴隷が主要な役を担うアイザック・ピカスタフの喜劇『南京錠』(1768年初演)のヒットによって逆転することになる。いささかコミカルさが強調されすぎたきらいもあるが、等身大に近いという意味では画期的な黒人像の出来であった。

18世紀日本の黒人表象に目を転ずるなら

ば、世界図や万国人物図においてギネア、マダガスカル、アビシニア、「黒人国」の人々がアフリカを代表する人物として描かれた。彼らは、「黒坊」あるいは「黒ん坊」と称されて、川柳にも詠われ、戯作にも登場した。長崎出島の存在は、白人であれ黒人であれ、異形の人々がこの世に存在することを知らしめた。当時の日本人の関心は紅毛人よりむしろ「黒坊」に向けられていたことは、『紅毛雑話』などからも明らかである。出島のオランダ商館で働く「黒坊」の召使は、出島を訪れた司馬江漢や大田南畝等の旅行記や日記に、渡辺秀石や広渡湖水などの蘭館絵巻の中に見出される。しかし、一般的な流布という観点からは、長崎版画を含む錦絵の果たした役割が大きい。18世紀日本の文芸における黒人表象は、英国での「高貴なる野蛮人」のイメージは望むべくもなく、ほとんどが従者として登場する。日本語が片言であることから生じる可笑しきは、西インド諸島訛りの英語を話す黒人召使と共通する。だが、英国と異なり黒人のいる風景が日常ではない日本では、想像力を恣に、黒坊は超人的な存在にも、奇怪な存在にもなり得たのである。

佐藤は、研究課題「ドイツにおけるアフリカ表象」と取り組むに当たり、18世紀ドイツ文芸における非ヨーロッパ表象、なかでもトルコ表象の受容を見定めることから始めた。その際、まずヘルダーの『人類歴史哲学考』(1784-91)や『人間性促進のための書簡』(1793-97)が、いかに複数座標軸的視座に立って、従来の歪曲された非ヨーロッパ像を論難するか、読み解いた。ついで、オーストリア国立図書館にて、18世紀後半に一世を風靡した「トルコものオペラ」の調査を行い、ウィーン軍事史博物館や市立歴史博物館にて、「第二次ウィーン包囲」の関係資料を蒐集した。これらの準備作業に基づいて、近世ドイツのトルコ人像の原型を形成したアイラー作『メフメト二世』(1600頃作)を考察し、そのうえで、『後宮からの奪還』(1782初演)、『チュニスの太守』(1780初演)、『フォルメンテラ島の隠者』(1786頃初演)等の「トルコものオペラ」に検討を加えた。その結果、「トルコものオペラ」に登場する北アフリカの太守が、近世ドイツの通俗的「野蛮・好色」なトルコ人像から、「寛容」なトルコ人像に変貌を遂げている点を見極めた。数世紀に亘るトルコ人像が、逆転する時を迎えたといえる。「トルコものオペラ」の「後宮の番人」を演じるアフリカ出身の黒人宦官もまた、次第に「野蛮・好色」の役回りから滑稽な道化役に変化してゆくのである。さらに、ヘルダーの『民謡集』(1778/79)に表れるトルコ像に分析を施して、ヘルダーによって弾劾される「野蛮なトルコ」とは、ひっきり、オリエン特やアフリカに対する暴虐な

ヨーロッパ自身の謂である点も明らかにした。

つぎに、以上の論考を踏まえて、ドイツ文芸が、いかにオスマントルコ領北アフリカとの遭遇の衝撃を伝えるのか、解き明かそうとした。その際、この問題設定において『アビシニアのキリスト教徒』以上に重要な作品、J.M.R. レンツのプラウトゥス翻案劇『アルジェの人々』(1775 作) に焦点を絞って、そこに描かれる北アフリカ像に考察を加えた。同じくレンツのプラウトゥス翻案劇『トルコの女奴隷』(1774) が、「トルコものオペラ」のパロディーとして仕立てられ、当代ドイツの身分制社会における自由の希求を訴えるとするならば、『アルジェの人々』は、原作『捕虜』を下敷きに、『トルコの女奴隷』をはるかに超えた次元で、「トルコものオペラ」と取り組む。すなわち、その根幹にある宗教的問題を真正面から見据えて、スペインの宿敵北アフリカの人々を登場させ、キリスト教的ヨーロッパ世界を相対視する。そして、異教徒に対する「野蛮」な偏見に痛棒を食らわせ、「文明のヨーロッパ」と「野蛮な北アフリカ」という通念が反転する。ここに、ヨーロッパの自己批判的精神の契機——異文化の衝突から生まれる創造的変化も読み取れる、と結論づけた。

最後に、オーストリア国立図書館にて、永らく等閑視されてきた 18 世紀後半期ドイツの「アフリカもの」戯曲を調査した。それに基づき、コツツェブー作『黒人奴隷たち』(1795 初演)をはじめとする七篇を対象に、アフリカ表象の実相とその変容に検討を加えた。その結果、「トルコものオペラ」では、アフリカ黒人が、「野蛮」ないし「滑稽」な「後宮の番人」という脇役として描かれるのに反して、ここでは、港町ハンブルクの侍女であれ、ジャマイカなど西インド諸島や南米スリナムの奴隷であれ、いわば教養市民の主人公として登場する点が判明した。アフリカがヨーロッパ文明批判の道具とされる側面は否めないのだが。しかも、フランス革命を迎えれば、奴隷貿易廃止運動と連動して、等身大の血肉を具えたアフリカ黒人も描かれ始めるのである。

笠原は、フランスとの関係に留意しながら、クニッゲの『アビシニア啓蒙物語』(1791) に見られるアフリカ表象、および、この問題と密接に関連する啓蒙期ヨーロッパのイスラーム像を解明する作業を行なった。後者は、クニッゲと同時代のドイツ語圏の作家であるレッシングとヘルダーのテキストの読解を通して行われた。レッシング初期の作品である『カルダーヌス弁護』(1754) は、キリスト教をユダヤ教やイスラームと比較したことが一因となって無神論者の疑いをかけられた 16 世紀イタリアの思想家カルダー

ノの名誉回復を試みた作品であるが、論述のなかに「イスラーム教徒」が突然登場して読者に語りかける特異な作品である。当作品の理解に当たっては、ピエール・ペール『歴史批評辞典』(1696) が鍵となる。『カルダーヌス弁護』は、イスタンブールに移住した 16 世紀ドイツの一神学者を論じた『アダム・ノイザーについて』(1774) を経て、エルサレムを舞台とする晩年の戯曲『賢者ナータン』(1779) に至る。ヘルダーは、『人類歴史哲学考』(1784-91) において、地球上に展開する多様な文化を対等に考察する視点を打ち出し、イスラーム世界を論じる。その際に、文化が相互影響のもとで不断に変化するという観点から、文芸を含め、ヨーロッパ文化の成立に当たってのイスラーム世界の影響が指摘されていることが注意されなければならない。クニッゲは、『人間交際術』(1788) の著者として知られるが、ドイツにおいてフランス革命を擁護する一連の著作を発表した著作家でもある。クニッゲ理解に当たっては、ルソーからの影響と差異が考慮されなければならない。『アビシニア啓蒙物語』は、ドイツの一地方都市の法律家ベンヤミン・ノルトマンが、アビシニアに渡っていた従兄に招かれて同地に赴き、暴君の追放に立会い、新たな政体の設立を助けるという筋立てのものである。アビシニアは、専制君主のもと、従兄によって様々な啓蒙的改革が施された王国として描かれているが、それは、当時のドイツの諸領邦の戯画でもある。クニッゲは、非ヨーロッパ世界を物語の展開の単なる舞台として用いていると言わなければならないが、ドイツ語を宮廷の言語とし、様々な技術を導入して効率的支配を追及する、ノルトマンが目当たりとするアビシニア宮廷の像は、非ヨーロッパ世界におけるヨーロッパ近代の導入のある種のあり方を名指すものとしても提示されていると言えよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ① 藤田 みどり、「喜歌劇にみる黒人奴隷像：ビカースタフ作『南京錠』をめぐって」、『異境』創刊号、1-64 頁、2008 年、査読無
- ③ 笠原 賢介、「18 世紀における非ヨーロッパ世界像とヨーロッパ：レッシングとヘルダーを手がかりにして」、『シェリング年報』16 巻、14-24 頁、2008 年、査読有
- ④ 佐藤 研一、「18 世紀ドイツ文芸にみるトルコ人像——モーツァルトの『後宮からの奪

還』とヘルダーの『民謡集』を中心にして」、
『ヘルダー研究』13巻、23-49頁、2007年、
査読有

⑤ Sato, Ken-ichi, Lenzens Kindheit in
Livland als Grundlage seines »Sturm und
Drang«-Schaffens, *Triangulum.*
Germanistisches Jahrbuch für Estland.
Lettland und Litauen, 12, 46-56, 2007, 査
読有

⑥ 笠原 賢介、「レッシングとイスラーム『カ
ルダース弁護』と『アダム・ノイザーにつ
いて』を手がかりにして」、『ヘルダー研究』
13巻、51-69頁、2007年、査読有

② 藤田 みどり、「病病とアフリカと東海散
士」、『岩波新古典文学大系』17巻月報、1-4
頁、2006年、査読無

〔学会発表〕(計 3件)

① 佐藤 研一、「J.M.R.レンツの描くトル
コと北アフリカ——プラウトゥスの翻案喜
劇『トルコの女奴隷』と『アルジェ人た
ち』をめぐって」、第65回十八世紀ドイツ文学研
究会、2008年9月5日

② 笠原 賢介、Herders *Ideen* und Watsuji
Tetsuro – Zur Geschichte der Herder-Wirkung im
außereuropäischen Gebiet, Conference of the
International Herder Society,
Friedrich-Schiller-Universität Jena、ドイツ連邦
共和国、2008年8月21日

③ 笠原 賢介、「18世紀における非ヨーロッ
パ世界像とヨーロッパ——レッシングとヘ
ルダーを手がかりにして」、日本シェリング
協会第16回大会シンポジウム、於日本女子
大学、2007年12月9日

〔図書〕(計 1件)

① 笠原 賢介 (共著)『ノイズとダイアロー
グの共同体——市民社会の現場から』、筑波
大学出版会、2008年、P 366～P 397

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田 緑 (FUJITA MIDORI)
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：10219024

(2) 研究分担者

佐藤 研一 (SATO KEN-ICHI)
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：80171744
笠原 賢介
(KASAHARA KENSUKE)
法政大学・文学部・教授
研究者番号：10152620

(3) 海外共同研究者 (連携研究者)

ヒルメス、カローラ (HILMES
CAROLA)
フランクフルト大学准教授
栗田 香子 (KURITA KYOUKO)
米国ボモナ大学准教授

様式 C-19 (記入例)

科学研究費補助金研究成果報告書